



金星（ヴィーナス）を追いかけて

アンドレア・ウルフ 著・矢羽野 薫 訳

角川書店 1,785円（税込） 294頁

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

2012年6月6日、8年ぶりに金星の日面経過（太陽面通過）を迎えました。次回は105年後の2117年になるため、いま地球に生きている私たちにとって事実上最後の観測機会となりました。

この現象を初めて予測したのは、新たな太陽系モデルに基づき計算を行ったヨハネス・ケプラーでしたが、その観測の重要性に気づいたのはエドモンド・ハレーでした。当時は地球軌道に対する各惑星軌道の大きさの比はわかっている、地球軌道の実寸が不明でした。複数の遠く離れた観測地点から金星の日面経過を観測することにより、太陽系の実寸が求められることをハレーは具体的に示したのです。

この本は、亡きハレーの提案に応じ、太陽系の真の大きさを求めるため、世界の隅々へ決死の遠征を試みた18世紀の天文学者たちの物語です。

（原題『Chasing Venus』）

筆者のアンドレア・ウルフは、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートでデザイン史を学んだノンフィクション作家です。著書『The Brother Gardeners』では米植物園芸図書館協会賞を受賞。今回は、ラテン語やスウェーデン語、ロシア語、フランス語などを含む膨大な資料調査を、友人などの助けを得ながら行い執筆したそうです。文献一覧や邦訳では省かれた（原書にある）詳細な注釈からも、本書の執筆はたいへんな作業であったことが想像できます。

18世紀に実施された各国の金星の日面経過の観測をこれほど詳しく包括的に取り上げた一般向けの読み物はほかに例がないでしょう。

筆者自身は天文学の専門家ではないので、金星の日面経過の観測からどのような計算を経て太陽視差や太陽-地球間距離を求めたのかという詳しい記述はありませんが、概念的な説明が図とともに

示されています。むしろ本書の本質的内容は、宇宙（太陽系）の実寸を解き明かす金星の日面経過という希有な現象に対し、各国が、そして天文学者らがどのような行動をとったか、という点です。

アメリカ東岸からの手紙がロンドンに到着するのに2、3カ月もかかるという、鉄道も蒸気船もない時代です。帆船や馬車、そして人力だけで、壊れやすい観測器具を携え、食料や衣類などの装備とともに荒野や僻地への旅をする。それだけでも危険が伴うのに1760年頃のヨーロッパは七年戦争の真っ只中。本来観測どころではない状況でした。戦火に見舞われ目的地に到達できない観測隊もありました。人間同士の戦いだけでなく、暑さや寒さとの戦い、ときには伝染病が彼らの命を奪っていきました。それでも意義ある観測を行い、その結果を文明社会に伝えようと、文字どおり決死の覚悟で遠征が行われたのです。命がけだったのは天文学者だけではありません。各国から注文が殺到したイギリスの望遠鏡職人ジェームズ・ショートも過労がたたり、ついに命を落としてしまうのです。度重なる困難を乗り越え、日面経過の日に間に合うよう観測地にかろうじて到達できても、天候に見放されてしまうという絶望感には涙を誘うものがあります。

本書には多くの人物、地名が登場するため、原書にあるような索引がぜひともほしいところでしたが、この点だけは残念です。

18世紀の天文学者魂というものが伝わってくる力作です。多大な人員と費用が投じられ、宗派や国の違いを越え、力を合わせるという、まさにビッグサイエンスの先駆けという点からも興味深い内容です。とくに天文学史、科学史に関心のある方々にお奨めしたい一冊です。

山田陽志郎（国立天文台 天文情報センター）